

スイスドイツ語におけるフランス語の影響

— 文法的特徴の借用に関する一考察 —

大 喜 祐 太

要旨：本稿の目的は、スイスドイツ語の文法的特徴へのフランス語の影響を考察することである。スイスで使用されているスイスドイツ語は、公用語の一つでもあるフランス語からの影響を受けていることがしばしば指摘されるが、先行研究でも指摘されている通り、大部分は名詞などの語彙の借用である。とはいえ、少数ながら、名詞の性やいくつかの構文などについてフランス語からの影響が見られる。本稿では、とりわけスイスドイツ語の存在表現の用法の独自性がフランス語との言語接触によるものなのかを議論する。

1. はじめに

本研究の目的は、スイスのドイツ語各方言に焦点を当て、標準ドイツ語とは異なるスイスドイツ語の表現、特に存在表現の地域的・用法的独自性を調査することである。

Ammon *et al.* (2004) や熊坂 (2010) などでもすでに扱われているように、標準ドイツ語とスイスのドイツ語の間には、発音・語彙・統語的特徴などの点で多くの違いがあり、さらにスイスの中でも異なる方言（たとえば、Zürich, Basel, Bern, Wallis などの各地域で話される方言）の間で多様性が見られる。Steiner (1921), Rush (1989, 2002), Christen *et al.* (2013) は、その要因の一つとして、公用語の一つでもあるフランス語などの周辺言語からの影響を指摘している。たとえば、(1) のように、標準ドイツ語では「向かい側に」を意味する副詞 *gegenüber* (against, in front of) が使用される状況で、スイスドイツ語では *vis-à-vis* が多用される (Steiner 1921 : 598)。

- (1) S Hotel Schwiizerhof isch *vis-à-vis* vom HB Züri. (ZH)

Hg. Das Hotel Schweizerhof ist gegenüber vom Zürich HB.

Engl. The Hotel Schweizerhof is in front of the Zurich main station.

この副詞がフランス語からの借用語であることは、音声・形態の両面から明確である。それに対して、統語的特徴の場合、たとえば、(2) の *es hat* (Sg. *es hät*) のような用例は、多くは置換借用となりうること、さらに、文脈に依存してその機能が多様となることによって、発音や語彙に比べて、異なる言語からの影響の有無についての判断が困難である。

- (2) Z Züri häts gester gschneit, aber i de Stadt *häts* kei Schnee me. (ZH) (Swiss SMS Corpus)

Hg. In Zürich hat es gestern geschneit, aber in der Stadt liegt kein Schnee mehr.

Engl. In Zurich, it snowed yesterday, but in the city there's no more snow.

本研究のための実地調査では、とりわけスイスの非人称存在表現に出現する「*es hat* 構文」などの基本動詞を中心とした統語的特徴について、母語話者の許容度・地理的分布を調べた。本稿での中心的な問いは、スイスの存在表現の独自性がフランス語との言語接触に由来するのかどうかということである。

2. ドイツ語圏スイスにおける言語接触

2.1 言語接触

Glück (2010: 644) によれば「言語接触」(language contact) とは、二つ、もしくは複数の言語が地理的な隣接関係を通じて接触することである。典型的な現象は、二言語併用と言語干渉である。「言語干渉」(interference) とは、言語接触が成立する状況下で、ある言語が別の言語に影響を与えることであり、あらゆる言語システムの領域に及ぶ。Glück (2010: 300) も指摘する通り、言語干渉が生じる可能性は、文法的な領域では語形成の領域よりもはるかに少なく、最も一般的であるのは、語彙の借用である。

2.2 ドイツ語圏スイスにおける語彙の借用

スイスドイツ語におけるフランス語の語彙の借用は、上述した (1) のようなものがある。加えて、フランス語圏スイスと国境を接する地域、たとえば Freiburg (*Fr.* Fribourg) などでは、(3) のように、「カフェオレ」(*Kafi au lait*) のような語彙だけでなく、「～が(眼の前)にある」(*Voilà*) や「～になる、(代金が) ～かかる」(*ça fait*) といった、明らかにフランス語の統語的特徴とみなせる借用も見られる。もちろん、(3) のような表現は、きわめて口語的な言い回しであり、フリブールのようなドイツ語とフランス語のバイリンガル地域のみで確認できる特異な事例である。

(3) *Voilà drü Kafi au lait, ça fait vier füzg.* (FR) (Peregrin 1982)

Hg. Hier sind drei Milchkafee, es kostet vier fünfzig.

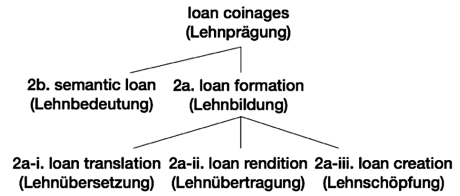
Engl. Here are three milk coffee, it costs four fifty.

Rush (1989: 7) によると、「特定の言語からスイスドイツ語への語彙借用については、Steiner (1921) の中で初めて言及された。Steiner (1921) は、フランスやフランス語圏スイスの地域からの直接的な借用を調査し、特に言語境界での口頭伝達に重点を置く」ということである。さらに、Rush (1989: 36-37) は、ドイツ語とフランス語の言語的境界に位置している街では、15 世紀から 17 世紀にかけて、言語的境界の変更が生じており、歴史的文献の中で、借用の確たる証拠が残っていると述べている。たとえば、Biel (*Fr.* Bienne), Freiburg, Wallis (*Fr.* Valais) といった街である。

2.3 借用の分類

そもそも「借用」(borrowing) とは何かということについて、Haugen (1950: 212) は、「わたしたちにとっての借用の定義の中心は、ある言語の中で見られる形式を別の言語の中で再生産を試みることである」としている。他にも、Rush (1989: 17, 23) によれば、「語彙の

借用」(lexical borrowing)は、外国語から自国語への語彙的要素の輸入として定義でき、言語共同体のメンバー間の個人的な接触の結果としての「直接的」借用と、書きことばを通じた「間接的」借用がある。語彙の借用には、知らない文化からなじみのない対象や概念を輸入する際に「必然的借用語」(*Hg. Bedürfnislehnwort*)を使用する場合と、すでに自国語の中にそれらのための用語が存在するときには、いわばユーモアや皮肉、社会的価値などを借用表現に与える場合とがある¹。つづけて、Rush (1989: 18)は、「純粹借用語」(pure loanwords)は「別の言語に由来し、自国語の用法に適應させられた語である。音声的形式・意味の両方が受容言語の中に輸入される」としている。これは、Haugen (1950: 214)の用語で言えば、「形態的輸入」(morphemic importation)であり、音声的側面について考慮しても、部分的にせよ全体的にせよ音声的代用というものもないということである。さらに、Haugen (1950: 214)では、部分的な形態的代用がある「混成借用」(the hybrid loan or loanblend)の分類を設けている。



Classification of the linguistic borrowing
(cf. Glück 2010, Betz 1949, Rush 1989)

純粹借用語に対して、「置換借用」(loan coinages)という概念がある。置換借用とは、Bußmann (2002: 398)によれば、「意味論的借用が含むあらゆる形式の上位概念」であり、先行研究に従って分類すると右上図のように示すことができる。Rush (1989: 18)は、置換借用の場合には、外国からきた語は、独自の形態素を用いる受容言語の中で再生産され、形成借用 (loan formation) もしくは意味借用 (semantic loan) として出現すると述べている。Haugen (1950: 214)の語で言い換えるならば、先述した「形態的輸入」に対して、輸入なしの完全な形態的代用 (complete morphemic substitution without importation) ということになる。さらに、Betz (1949: 27)に従えば、「翻訳借用」(loan translation)とは「モデルとなる表現の対訳」であり、「外国語のモデルから、自国語の中にある材料を用いて、新しい語を形成する」のが「形成借用」(loan formation)である。さらに、比較的自由に部分的に翻訳借用をする「自由翻訳借用」(loan rendition)や、外国語のモデルとなる表現を翻訳することによって、形式に依存せず、新しい語を形成する「創造借用」(loan creation)などがある。

2.4 スイスドイツ語におけるフランス語からの借用例

フランス語からスイスドイツ語に借用された語で言えば、たとえば、「さようなら」を意味する *adieu* や「食器類」を表す *service* などを、先に挙げた「純粹借用語」に数え入れることができるであろう。他にも、たとえば、*sec* (*sec*; *Hg. trocken*), *vis-à-vis* (*vis-à-vis*; *Hg. gegenüber*), *Trottoir* (*trottoir*; *Hg. Gehsteig*), *Ambulanz* (*ambulance*; *Hg. Krankenwagen*), *Dictionär* (*dictionnaire*; *Hg. Wörterbuch*) などといった語がフランス語からの純粹借用語に含まれると考えられる。

他にもしばしば観察できる例は、翻訳借用である。「鳥肌」を意味する *Hühnerhaut* は、フランス語の *chair de poule* に由来し、標準ドイツ語では、*Gänsehaut* を用いるのが普通である。「失敗をする、間違える」ということを意味する *si trumpiere* という表現は、*se tromper* からの翻訳借用であると考えられ、標準ドイツ語では *sich täuschen* を使用する (Steiner 1921: 593)。また、構文的用法に関する翻訳借用は、「私は寒い (寒さを感じている)」ということを表現する

ich ha chalt があり、この表現はフランス語で同様の意味を表す *j'ai froid* と完全な意味的かつ形式的対応がある。一方、標準ドイツ語では、*sein* 動詞を使った *mir ist kalt* しか本来許容されない。

3. 文法的特徴の借用

Haugen (1950 : 224) は、ある性質が形式的かつ構造的である場合、外国語的要素の侵入を免れるとしている。Haugen (1950 : 224) は、米ノルウェー語と米スウェーデン語への米英語の影響を調べており、その調査内の語彙の品詞は、それぞれ名詞 (75.5%)、動詞 (18.4%)、形容詞 (3.4%)、副詞および前置詞 (1.2%)、感嘆詞 (1.4%) となっている。実際、Rush (1989 : 371) のスイスドイツ語の研究で記録された借用語 (1274 words, 1550-1650) のうち、約 90% が名詞で、その残りの約 85% が動詞であり、副詞、形容詞、前置詞、感嘆詞は非常に少ない。

そうした語彙の借用に加えて、文法的特徴の借用がある。この借用は、Haugen (1950) も指摘する通り、他のカテゴリーと比較しても多くはないと言えるが、その中でも、スイスドイツ語に最も多く確認できるのは名詞の性についてである。Schilling (1970 : 188) は、「スイスドイツ語には、標準ドイツ語とは違う性をもつ名詞があり、とりわけそれらはフランス語由来の単語である」としている。Rush (1989 : 372) に従えば、受容言語内の借用語の性は、借用語は多くの場合起点言語の性を採用する。両言語間で相違があるのは、新しい性が借用語の接辞によって決定される場合と、ドイツ語の同義語からの類推によって生じる場合の二つである。たとえば、*die Foto* (photo; *Hg. das*), *der Dessert* (dessert; *Hg. das*), *der Schoggi* (chocolate; *Hg. die Schokolade*) といった語は、標準ドイツ語と文法的な性が異なるものである。

3.1 スイスドイツ語存在構文における借用の可能性

文法的特徴の借用については、名詞の性などに加えて、非人称存在表現である *es hat* 構文についてもしばしばフランス語からの影響が指摘される。この *haben* (have) を使用した存在構文は、標準ドイツ語では使用されず、しかも、フランス語の存在表現に、一見したところ *es hat* 構文に対応しているように見える *il y a* 構文があるからである。本稿で議論したいのは、標準ドイツ語にはないスイスドイツ語の存在表現の独自性がフランス語との言語接触に由来するのかどうかということである。

3.1.1 *es hat* はフランス語からの翻訳借用であると主張する立場

この立場を支持するものには、第一に、*il y a* との関連性を示唆する先行研究の記述がある。Balmer (1950 : 10) は、規範文法の観点から「外来語との関係で言うと、フランス語の単語や言い回しに起源を持つ『フランス語法』(Gallizismen) が警告されなければならない。たとえば、*es gibt* の代わりに、*es hat (il y a)* を用いることなどである」と述べている。つまり、標準ドイツ語でしばしば使用される *es gibt* 構文を用いる代わりに、ドイツ語圏スイスでは *es hat* が多用されるということである。たしかに、語用論的観点から見て、存在を表現するいくつかの用法については類似点を見出せる。具体的には、眼の前の事物を表現する「直示的所在文」(deictic locative) に関してである (Daigi 2015 : 89)。

- (4) a. *Hg.* ??Schau mal! *Es gibt* einen Polizeiwagen vor deinem Haus.
b. *Engl.* Look! *There is* a police car in front of your house.
c. *Fr.* Regarde! *Il y a* une voiture de police devant ta maison. (東郷 2009)
d. *Sg.* Gsehsch?! Vor dim Huus *häts* äs Polizeiauto! (ZH)

標準ドイツ語の(4a)では、直示的所在文に対して *es gibt* は許容されず、*sein* 動詞や *stehen* などの所在動詞を用いる方が自然であるのに対し、(4c, d) のように、フランス語では *il y a* が、スイスドイツ語では *es hat* がそれぞれ使用される。そのため、この直示的所在文の使用については、*es hat* と *il y a* に共通点を見出せると言える。

他にも、社会言語学的要因を考慮するならば、ドイツ語圏スイスでは、ドイツと比較して、歴史的に見ても、スイスの他の公用語であるフランス語やイタリア語の語彙を用いることに抵抗がなかったことが先行研究でも指摘されている (Bickel & Landolt 2012 : 82-83)。

3.1.2 *es hat* はフランス語からの翻訳借用ではないと主張する立場

Schilling (1970 : 192) は、「ドイツ語ではいささか奇異に響き、フランス語で類例 (eine Parallele) を持つような構文を、すぐさま統語借用であると結論づけることはできない。たとえば、*es gibt* に対して、*es hat* がフランス語の *il y a* を思い起こさせるようなフランス語法でないことは明確である」と述べ、この主張は、前節の *es hat* に対するフランス語からの影響を支持する立場を真っ向から否定するものである。たしかに、以下に詳述する通り、(a) 存在表現の類型論的分類、(b) 語用論的用法、(c) *es hat* の地理的分布を考慮すれば、*es hat* と *il y a* との関係性を認めることは早計であると言わざるを得ない。

まず、(a) 存在表現の類型論的分類について、Creissels (2014 : 17-18, 48) は、存在述語構文 (存在表現) は、7つに分類できると述べている²。Creissels (2014) に従えば、*es hat* の構造は多くの言語で確認できる一方で、*il y a* の構造はきわめて稀な表現である。

つぎに、(b) 語用論的用法については、先に述べた通り、*es hat* と *il y a* は、共に直示的所在文に使用されることが明らかになったものの、「実在文」に対しては、*es hat* を用いることができない。以下の(5)は、ネス湖のネッシーの実在を主張するという状況であるが、アンケート調査の結果によれば、(5a) の *haben* を用いた表現はほぼ許容されないということが分かっている³。

- (5) a. ??*Häts* s Nessie oder nöd? (1/100)
b. *Gits* s Nessie oder nöd? (95/100)
Hg. *Gibt es* Nessie oder nicht?
Engl. Is there Nessi or not?

さらに存在表現に対して *es hat* の使用に揺れがある場合、ドイツ語圏スイス内の地域的なものではなく語用論的差異によるということが出来る。たとえば、以下のような用例である。

- (6) a. *Häts* nöd au no so en Bastellade irgendwo bim Rennweg? Weisch du wo genau?
b. *Gits* nöd au no so en Bastellade irgendwo bim Rennweg? Weisch du wo genau?

(7) a. Ja, eigentlich scho, ich brüchti no noji Ritschueh, di *hätts* bim Outlet Landquart.

Meinsch mer chönted au det go lädele? Oder wotsch id Stadt?

b. Ja, eigentlich scho, ich brüchti no noji Ritschueh, di *gits* bim Outlet Landquart.

Meinsch mer chönted au det go lädele? Oder wotsch id Stadt?

どちらが自然であるかという問いに対して、(6) では *es hat* が、(7) では *es gibt* が優勢である。(6) で *es hat* が優勢なのは、「どこに（靴屋が）あるか知っているか」(Weisch du wo genau?) という表現が「所在規定」の解釈を強めているからであると考えられる。その一方、(7) の状況で *es gibt* が好まれるのは、(7) では、「乗馬用の靴」(Ritschueh) を手にすることができるかどうかが問題であり、母語話者にとっては「提供」の解釈が自然であるからである。このように、発話状況を考慮すると、スイスドイツ語では、*es hat* と *es gibt* を使い分けられていると考えられる。

最後に、(c) *es hat* の地理的分布については、*es hat* 構文は、スイス周辺地域、すなわち、ドイツ語圏スイス、ドイツ南西部、フォアアルルベルク地方、アルザス地方などのアレマン語圏全域に広がっていることは先行研究でも指摘されている (cf. Ammon *et al.* 2004: 320, Atlas zur deutschen Alltagssprache)。さらに、アンケート調査でも、スイス国内の言語的境界の地域 (ex. Freiburg, Biel, Bern) とドイツ寄りの地域 (ex. St. Gallen) を比較しても、*es hat* の用法に有意な違いがないことから、*es hat* はフランスやフランス語圏スイスと接する地域に顕著に見られる構文であるというわけではない。

3.2 他の表現との比較

先にも挙げた借用と考えられる他の表現と比較しても、*es hat* をフランス語との言語接触の結果だと結論づける証拠は十分でないように思われる。たとえば、*Hühnerhuut* は一つの名詞として *chair de poule* と一対一の明確な対応があり、フランス語からの翻訳借用であると理解できる。副詞の *vis-à-vis* についても、発音や綴りの面からも借用の根拠が十分であると断定できる。*ich ha chalt* もフランス語の表現との逐語的な対応と使用状況や用法の一致を挙げることができるだろう。そうした表現と比較して、*es hat* と *il y a* の動詞である *haben* と *avoir* は、たしかに共通の用法を持つものの、逐語的な対応や使用状況の完全な一致ということについては条件を満たしているとは言えない。

4. おわりに

言語接触を特定するために第一に必要なのは、地理的な言語の隣接関係または二言語併用状況である。加えて、言語接触の証拠となるのは、(a) 明確な形式の対応、(b) 明確な意味の対応、(c) 借用についての歴史的記述の存在、などが挙げられる。Haugen (1950: 228) も指摘する通り、異なる言語の二つの語の間に意味的・音声的類似性が存在するとき、借用が生じているのかどうかを決めるのはかなり困難であるし、文法的特徴の借用は、語彙の借用と比較して稀である。このことについては、スイスドイツ語でも同様であるだろう。先行研究では、*es hat* は方言的な用法で *es gibt* の言い換えであると指摘するものも多いが、実際の用例をつぶさに観察すると、*es hat* と *es gibt* の意味は交換可能ではない。しかも、実在文について言えば、*il y a* は、

es hat ではなく、むしろ *es gibt* 構文との意味的類似性を指摘できることが分かっている。したがって、ここまでの議論を踏まえれば、*es hat* への *il y a* の影響を特定することはできない。もちろん、*es hat* の一部の用法が *il y a* の用法と酷似していて、なおかつフランス語圏との境界付近のみでその用法が多用されているならば、*es hat* のある特定の用法が *il y a* からの（部分的な）意味借用であると判断できる材料を提供できるかもしれない。そのような議論のためにも、引き続きスイスドイツ語存在表現に関して、十分な歴史的検証、他の言語の存在表現との比較が必要である。

註

- 1 Glück (2010 : 391) によれば、「借用表現」(Lehngut, loan currency) は、異なるレベルで、ある言語から別の言語への影響関係の形式を総合する概念であり、音韻借用 (Lehnphonem)、文字借用 (Lehngraphem)、形態借用 (Lehnmorphem)、借用語 (Lehnwort)、フレーズ借用 (Lehnwendung)、統語借用 (Lehnsyntax) などに分類することができる。
- 2 Creissels (2014 : 17-18, 48) は、256 の言語の存在述語構文を、「他動詞的所有存在構文」(trans. poss-existentials) (*es hat* はこの構文に含まれる)、「存在を表現するための述語を含む存在構文」(existentials constructions involving dedicated existential predicators)、「所在的存在構文」(loc-existentials)、「結合的所有構文」(incorp. poss-existentials)、「他動詞的所在的存在構文」(poss/loc-existentials)、「随格存在構文」(com-existentials)、「同定文的存在構文」(id-existentials) に分類している。その中でも、他動詞的所有存在構文、存在を表現するための述語を含む存在構文、所在的存在構文の3つは、世界的に広く分布していると述べている。それに対して、「結合的所有構文」「他動詞的所在的存在構文」「随格存在構文」「同定文的存在構文」は、周縁的なものであり、特に *il y a* が含まれる「他動詞的所在的存在構文」は、フランス語以外では、カタルーニャ語などに見られるものであり、類型論的に見ると珍しい構文であると Creissels (2012) は主張している。
- 3 アンケート調査では、この用例について *es hat* を許容すると答えたのは 100 人中 1 人のみで、95 人が *es gibt* を使用すると回答した。なお、残りの 4 人は、他の表現 (たとえば、*existieren* など) を使用すると回答した。

略号一覧

Engl.	英語
Fr.	フランス語
FR	フリブール
Hg.	標準ドイツ語
Sg.	スイスドイツ語
ZH	チューリヒ

参考文献

- 熊坂亮 (2010) : 「スイスのドイツ語：方言と標準変種の接点」『北海道大学独語独文学研究年報』36 : 22-40.
- 東郷雄二 (2009) : 「フランス語存在文と探索領域—意味解釈の文脈依存性と談話モデル—」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』日本学術振興会科学研究費補助金 研究成

果報告書.

- Ammon, U, Bickel, H, & Ebner, J. (2004): Variantenwörterbuch des Deutschen. Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol. Berlin; New York, de Gruyter.
- Balmer, A. (1950): Gewandtheit im schriftlichen Ausdruck. Sonderdruck aus der PTT-Zeitschrift. Bern, Schweizer Post- Telegraphen- und Telephonverwaltung.
- Betz, W. (1949): Deutsch und Lateinisch: die Lehnbildungen der althochdeutschen Benediktinerregeln. Bonn, Bouvier.
- Bucheli, C. & Glaser, E. (2002): The Syntactic Atlas of Swiss German Dialects: empirical and methodological problems. In: Barbiers, Sjef/Cornips, Leonie/van der Kleij, Susanne (Hrsg.): Syntactic Microvariation, 41-74.
- Bußmann, H. (2002). Lexikon der Sprachwissenschaft. Dritte, aktualisierte und erweiterte Auflage. Stuttgart, Kröner.
- Creissels, D. (2014): Existential predication in typological perspective. Ms., Université Lyon.
- Daigi, Y. (2015): Existenzkonstruktion als Sprechakt — Akzeptabilität der es gibt-Konstruktion. Germanistik Kyoto. Kyoto, Germanistenverband Kyoto, S. 79-96.
- Glück, H. (2010). Metzler Lexikon Sprache. 4. aktualisierte und überarbeitete Auflage. Stuttgart; Weimar, Metzler.
- Haugen, E. (1950): The Analysis of Linguistic Borrowing. Language 26-2, pp. 210-231.
- Löffler, H. (2010): Germanistische Soziolinguistik 4. neu bearbeitete Auflage. Berlin, Erich Schmidt Verlag.
- Pfenninger, S. E. (2009): Grammaticalization Paths of English and High German Existential Constructions: A Corpus-based study. Bern/Berlin, Peter Lang.
- Rash, F. (1989): French and Italian lexical influences in German-speaking Switzerland (1550-1650). Berlin; New York, Walter de Gruyter.
- Schilling, R. (1970): Romanische Elemente im Schweizerhochdeutschen. Mannheim; Wien; Zürich, Dudenverlag.